

# 『こころ』における「～といふ言葉」の働き

田島 優

## 1. はじめに

『こころ』において「～といふ言葉」によって引用されている語や表現は、『こころ』の主題に関わるキーワードやキーワードセンテンスである場合が多いようである。これは、『こころ』が回想というスタイルであることと大いに関係があると思われる。

回想においては、語り手が全体を知った上で昔を回顧していく。そして、それぞれの場面においてその時の発話で使用された語や表現を「～といふ言葉」によって再度取り立てたり、またその場面における説明にあたって「～といふ言葉」を用いたりしている。したがって、それらの語や表現は、単にその場面に関わるだけではなく、全体に関わってくるように思われる。

『こころ』において「～といふ言葉」にこのような働きが現れるのは、回想のスタイルによって派生する様々な特徴の一つといえよう。さらにもっと大きな要因として、『こころ』の構成や内容によると考えられる。

上と中の私の手記は、先生の遺書を読んで全体を把握した上での記述である<sup>1)</sup>。その上と中において、私は自分が疑問に思い気になっていた先生の語った語や表現を「～といふ言葉」によって示し

ている。そして、その疑問の解答を読者に下の「先生の遺書」の中に求めさせるようにしている。また下の先生の遺書では、先生が私に伝えたい重要な内容だけを選びすぐって記述している。

このような点で、『こころ』においては「～といふ言葉」で示されている語や表現は、作品の主題に関わっていると考えられる。

以上述べたことについて、『こころ』での用例を、漱石の他の作品の用例などと比較しながら説明していく。

## 2. 『こころ』での用例

『こころ』の原稿・初出(朝日新聞掲載)において、「～といふ言葉」の用例は23例ある。なお単行本(初版)になると24例あり1例増える。これは、後に掲げる11の例が、原稿・初出では「イゴイストの意味」となっていたのを、単行本化の際に「イゴイストといふ言葉の意味」に改めたからである。

この1例を含めて『こころ』の24例すべてを挙げてみよう。本来ならばその語や表現が使用されていた発話まで示すと、それぞれのものの使用された状況を確認できるが、ここでは紙幅の関係で「～といふ言葉」を含む一文にとどめておく<sup>2)</sup>。ただし、その語や表現が先の発話などに明確に示されている場合には、最後

に★を施した。なお、前には示されていないが、文脈から以前に既に話題になっていたと考えるものには☆を施した。

- 1 是が私の口を出た先生といふ言葉の始りである。(3) ★
- 2 私には喧嘩といふ言葉が口へ出て来なかつた。(9) ★
- 3 先生が最後に付け加へた「妻君の為に」といふ言葉は妙に其時の私の心を暖かにした。(10) ★
- 4 私は其後も長い間此「妻君の為に」といふ言葉を忘れなかつた。(10) ★
- 5 先生のいつた自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいふ言葉も、其場限りの浅い印象を与へた丈で、後は何等のこだわりを私の頭に残さなかつた。(24) ★
- 6 先生の話のうちでたゞ一つ底迄聞きなかつたのは、人間がいざといふ間際に、誰でも悪人になるといふ言葉の意味であつた。(29) ★
- 7 訂くといふ言葉が、突然恐ろしい響を以て、私の耳を打つた。(31) ★
- 8 尿毒症といふ言葉も意味も私には解らなかつた。(34) ★

以上、上「先生と私」

- 9 その中には、「昔の親は子に食はせて貰つたのに、今の親は子に食はれる丈だ」などといふ言葉があつた。(44) ☆
- 10 私は此「おれが死んだら」といふ言葉に一種の記憶を有つてゐた。(46) ★
- 11 私は兄に向つて、自分の使つてゐるイゴイストといふ言葉の意味が能く解るかと思ひ返して遣りなかつた。(51)

★ 原稿・初出は「イゴイストの意味」とある。

以上、中「両親と私」

- 12 此儘人間の中に取り残されたミイラの様子に存在して行かうか、それとも……其時分の私は「それとも」といふ言葉を心のうちで繰り返すたびにぞつとしました。(55) ★
- 13 さうして忙がしいといふ言葉を口癖のやうに使ひました。(62) ☆
- 14 寺に生れた彼は、常に精進といふ言葉を使ひました。(73) ☆
- 15 其時彼の用ひた道といふ言葉は、恐らく彼にも能く解つてゐなかつたでせう。(73) ★
- 16 彼はモハメツドと剣といふ言葉に大なる興味を有つてゐるやうでした。(74) ☆
- 17 其時私はしきりに人間らしいといふ言葉を使ひました。(85) ☆
- 18 Kは此人間らしいといふ言葉のうちに、私が自分の弱点の凡てを隠してゐると云ふのです。(85) ★
- 19 更に六づかしく云へば、落ち付くなどといふ言葉は、此際決して使はれた義理でなかつたのかも知れません。(93) ★
- 20 Kは昔しから精進といふ言葉が好でした。(95) ☆
- 21 斯ういふ過去を二人の間に通り抜けて来てゐるのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だといふ言葉は、Kに取つて痛いに違ひなかつたのです。(95) ★
- 22 不図其所に気のついた私は、突然彼の用ひた「覚悟」といふ言葉を連想し出しました。(97) ★

- 23 世話序に死後の片付方も頼みたい  
 といふ言葉もありました。(102) ☆
- 24 私は殉死といふ言葉を殆んど忘れ  
 ておきました。(110) ★
- 以上、下「先生と遺書」

この24例を見ると、いずれも引用された発話で使用されていた例(★)か、以前から話題に上がり語り手にとって実際に耳にした語や表現(☆)である。☆の中では、14の「精進」は20に、また17の「人間らしい」は18でも再度取り上げられている。これら24例の中に、『こころ』に関する研究書や論文においてキーワードやキーセンテンスとして扱われているものを多く見出せよう。

### 3. 漱石作品における使用度数

『こころ』では「～といふ言葉」の使用は24例あった。それでは、漱石の他の作品での使用状況はどうなっているのだろうか。それぞれの作品での「～といふ言葉(～と云ふ言葉)」の使用度数を調べてみると、表1のようなになる<sup>3)</sup>。

表1

『吾輩は猫である』2例	
『坊っちゃん』4例	『草枕』1例
『虞美人草』1例	『三四郎』6例
『それから』3例	『門』5例
『彼岸過迄』16例	『行人』26例
『こころ』24例	『道草』10例
『明暗』23例	

表1を見ると、後期三部作である『彼

岸過迄』からその使用が急激に増加していることがわかる。『彼岸過迄』の体裁については、朝日新聞に掲載した時の緒言である「彼岸過迄に就いて」において、漱石は次のように語っている。

かねてから自分は個々の短編を重ねた末に、其の個々の短編が相合して一長編を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだらうかといふ意見を持してみた。(中略)もし自分の手際が許すなら此の「彼岸過迄」をかねての思はく通りに作り上げたいと考へてゐる。

この緒言で述べていたように、『彼岸過迄』は短編の組み合わせによって一つの作品が構成されている。いわゆる後期三部作はいずれもこの体裁を採用している。『彼岸過迄』では「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」そして「結末」。『行人』では「友達」「兄」「帰ってから」「塵労」。そして、『こころ』では上「先生と私」、中「両親と私」、下「先生と遺書」の三部構成である。なお、『彼岸過迄』においては「雨の降る日」と「須永の話」「松本の話」は回想になっている。「雨の降る日」においては2の途中から千代子の回想になる。記号ダッシュ「—」によって回想の始まりが示されている。「須永の話」では3の最初あたりから回想になる。この場合も記号ダッシュ「—」が施されている。「松本の話」では最初のあたりは須永の性格について松本が語っているが、全体的に回想と見てよいであろう。この「松本の話」には「雨の降る日」や「須永の話」で施されていた回想の始まりを示す記号は見られない。

『彼岸過迄』には回想の箇所が多く含まれているが、その語り手はそれぞれ千代子、須永、松本と章によって異なっている。

『行人』においては、最後の章である「塵勞」の(28)の途中からHさんの手紙による回想が始まっている。

『ころ』では、上と中は私による、下は先生による回想であり、全編が回想によって構成されている。

これら後期三部作では、「～といふ言葉」は、『彼岸過迄』においては16例中7例が、『行人』においては26例中10例が先に挙げた回想の章に用いられている。『彼岸過迄』の前の作品である『門』においても、5例中3例が宗助が御米と出会った頃を回想した(14)での使用である。

「～といふ言葉」の使用が、『彼岸過迄』や『行人』で急激的に増加したのは、回想のスタイルの採用が大きく関わっているように思われる。しかし、それらの作品の回想における「～といふ言葉」の使用率を考えると、その急減な増加は単に回想によるものだけとはいえない。

回想のスタイルの採用に加えて、『彼岸過迄』以降の作品においては、それ以前に比べ、漱石がことばに対してこだわりを持つようになったと思われる。これは回想による「～といふ言葉」の使用の影響によるものとは断定はできないが、『門』までの作品との間に使用度数が大きく異なっており、漱石の執筆態度に変化があったことは確かである。

後期三部作は、それぞれが短編を組み合わせた形態であることから、回想のスタイルをとっていなくても、それぞれが回想によるものといえなくもない。『彼

岸過迄』では「結末」に、

彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聴く一種の探訪に過ぎなかつた。

と記しているように、この作品は一種の聞き書きといえよう。

この『彼岸過迄』においては、『ころ』の用例とは異なり、心中で思っているが、実際には口には出さなかった内容までが「～といふ言葉」で示されている。これは、回想の章に限ったことではない(回想での用例については第6節で見る)。このような点からも、この作品には回想的な要素が強いように感じられる。

友達に対してなら云ひ得る「君の為だから」といふ言葉も挨拶も有つてみたのだが、此場合には夫が丸で役に立たなかつた。(「報告」3)

彼は洋食店で二人の談話に注意を払ふ間にも、何々さんとか何々子とか或は御何とかいふ言葉が屹度何処かへ交じつて来るだらうと心待に待つてみたのだが、彼等は特にそれを避ける必要でもある如くに、お互の名は勿論、第三者の名も決して引合にさへ出さなかつたのである。

(「報告」5)

またこの『彼岸過迄』では、新聞連載にあたって、その日の分の末尾あたりの発話で使用されたことばを、明るる日の冒頭あたりに「～といふ言葉」で引用している場合がある。

須永の母は猶「あんな顔はして居りますが、見懸によらない実意のある

剽軽者で御座いますから」と云つて一人で笑つた。(「停留所」12)

剽軽者といふ言葉は田口の風采なり態度なりに照り合はせて見て、何うも敬太郎の腑に落ちない形容であつた。(13)

つまり僕の様な高等遊民でないからです。いくら他の感情を書したつて、困りやしないといふ余裕がないからです(「報告」9)

「実は田口さんからは伺がはずに参つたのですが、今御使ひになつた高等遊民といふ言葉は本当の意味で御用ひなのですか」(10)

このように「～といふ言葉」で引用された語や表現は前日の内容とをつなぐための重要なキーワードとなっており、新聞小説における一つの技法と考えられる。

『行人』では、「塵勞」におけるHさんの手紙による回想以外は、二郎による一人称の語りとなっている。一人称の語りの場合は、『こころ』の場合と同じく、全体を知った上での語りのため、例えば次のように心理描写においては回想的な面が見られるように思われる。

「実はお直の事だがね」兄は甚だ云ひ悪い所をやつと云ひ切つたといふ風に見えた。自分は「お直」といふ言葉を聞くや否や冷りとした。

(「兄」18)

「夫では打ち明けるが、実は直の節操を御前に試して貰ひたいのだ」  
自分は「節操を試す」といふ言葉

を聞いた時、本当に驚いた。

(「兄」24)

車夫は心得て「奥さんの方が先だ」と相図した。嫂の車が自分の傍を擦り抜ける時、彼女は例の片脛を見せて「御先へ」と挨拶した。自分は「さあ何うぞ」と云つたやうなものゝ、腹の中では車夫の口にした奥さんといふ言葉が大いに気になつた。

(「兄」39)

最も自分も御饒舌だから、兄と違つた方面で、ルネサンスとかゴシックとかいふ言葉を心得顔に振り廻す事も多かつた。(「帰つてから」21)

#### 4. 「～といふ言葉」の働き(1)

「～という」という形式については、寺村(1981)中畠(1990)丹羽(1993)などを始めとして、これまでに多くの研究がなされている。それらの論考で問題となっているのは、「という」の使用には任意か必須の場合があり、その条件や、また任意の場合「という」の有無による意味用法の違いが問題となっているようである。本稿では、それらの点については踏み込まない。

ただ、「～といふ言葉」の場合に関してまとめておくと、寺村(1981)で示されている通り、「といふ」は必須であり、被修飾語である「言葉」の意味を示す内容補充の役割を担っている。また、文など長い表現であってもこの「～といふ言葉」を用いることによって提示することが可能となる。

「～といふ言葉」に限らないで、単に「～といふ」の形式について、漱石の作品での使用度数を青空文庫で検索した<sup>4)</sup>とこ

ろ、表1に挙げたすべての作品において100以上の用例があった。これらの用例の多くは地の文、すなわち語りの文において使用されている。この点からも「～といふ」の形式は語りにおいて物事を説明したり取り立てたりする場合には欠かせない表現といえよう。

また「～といふ言葉」も、語り手による説明の際に用いられているが、作品の文のスタイルによって、その働きに違いが見られるようである。先には『こころ』での24例を挙げたが、『こころ』における働きを理解しやすいように、『こころ』とは少し働きが異なるように思われる『三四郎』の用例を見てみよう。『三四郎』においては6例の使用例があるが、5例は地の文、そして1例は会話文での使用である。

① すると今度は与次郎の方から、三四郎に向つて、

「どうも妙な顔だな。如何にも生活に疲れてゐる様な顔だ。世紀末の顔だ」と批評し出した。三四郎は、此批評に対しても依然として、

「さういふ訳でもないが……」を繰り返してゐた。三四郎は世紀末杯と云ふ言葉を聞いて嬉しがる程に、まだ人工的の空気に触れてゐなかつた。(4)

② 美禰子は其塊を指さして云つた。

「駝鳥の襟巻に似てゐるでせう」

三四郎はボーアと云ふ言葉を知らなかつた。それで知らないと言つた。(4)

③ 「空の色が濁りました」と美禰子が云つた。

三四郎は流れから眼を放して、上を

見た。かう云ふ空の模様を見たのは始めては空が濁つたといふ言葉を聞いたのは此時が始めてである。(5)

④ 「迷へる子——解つて?」

(中略)

迷へる子といふ言葉は解つた様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも、寧ろ此言葉を使つた女の意味である。(5)

⑤ 「里見のは乱暴の内訌ですか」

三四郎は黙つて二人の批評を聞いてゐた。何方の批評も腑に落ちない。乱暴といふ言葉が、どうして美禰子の上に使へるか、それからが第一不思議であつた。(6)

⑥ 昔しの偽善家に対して、今は露悪家ばかりの状態にある。——君、露悪といふ言葉を聞いた事がありますか

「いゝえ」

「今僕が即席に作つた言葉だ。(7)

いずれの用例も、先の発話に出現している語や表現の引用であり、『こころ』と共通している。しかし、この中で『三四郎』の研究で取り上げられることの多い表現は④だけではないだろうか。「迷へる子(ストレー・シープ)」は、美禰子に対して、ひとりごとのようにつぶやいたり、絵端書にも記して送ったりしており、『三四郎』の中で何度も使用されている語である。

挙例の際に、(中略)としたが、新聞の連載では「迷へる子——解つて?」で終わっている。そして明るく日は、三四郎がその返事に窮している状況から始まり、その中で使用されている。『彼岸過

迄』での方法と同じである。この表現で終わり、また翌日再度取り上げられることによって、この表現は読者に印象づけられる。そして、この「迷<sup>ストレイ</sup>へる<sup>シフ</sup>子」は、後に何度も使用されており、『三四郎』においてはキーワードとなっている。

この例や⑥（広田先生の発話）の他は、それぞれの場面において、三四郎が気になった表現についての説明といえよう。

## 5. 「～といふ言葉」の働き (2)

### －『こころ』を中心に－

『こころ』においても、すべての用例がそれぞれの場面で気になった語や表現であり、『三四郎』と違いはない。しかし、『こころ』においては作品の主題と関わっている語や表現が多かった。その違いは何によるのであろうか。

『こころ』は、先に述べたように、上の「先生と私」と中の「両親と私」は私の回想に基づく手記であり、そして下の「先生の遺書」は先生の回想に基づく遺書である。私は、先生の遺書を既に読んでおり、すべてを把握している。その上で、遺書の内容に触れないように、過去を思い出しながら上と中を記述している。したがって、それぞれの場면을記述するにあたって、その場面で気になっていた語や表現を「～といふ言葉」で引用して取り挙げている。

その中には、読者に下の「先生の遺書」にその答えを求めさせるように、当時気になった語や表現として意図的に提示しているように見える場合もある。例えば、5、6、7、10の例などはそのように考えられないだろうか。

5 先生のいつた自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいふ言葉も、其場限りの浅い印象を与へた丈で、後は何等のこだわりを私の頭に残さなかつた。

6 先生の話のうちでたゞ一つ底迄聞きたかつたのは、人間がいざといふ間際に、誰でも悪人になるといふ言葉の意味であつた。単なる言葉としては、是丈でも私に解らない事はなかつた。然し私は此句に就いてもつと知りたかつた。

7 「私の過去をあば詰つてもですか」  
詰つといふ言葉が、突然恐ろしい響を以て、私の耳を打つた。

私は今私の前に坐つてゐるのが、一人の罪人であつて、不断から尊敬してゐる先生でないやうな気がした。先生の顔は蒼かつた。

10 「おれが死んだら、どうか御母さん<sup>かあ</sup>を大事にして遣つてくれ」

私は此「おれが死んだら」といふ言葉に一種の記憶を有つてみた。東京を立つ時、先生が奥さんに向つて何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した晩の事であつた。私は笑を帯びた先生の顔と、縁喜でもない<sup>かあ</sup>と耳を塞いだ奥さんの様子とを憶ひ出した。

一方、先生の遺書は、先生が私に伝えるために過去を回想しながら急いで書き上げたものである。先生が示している語や表現は、多くの事象の中から特に大事な場面を選び抜いて、さらにそこでの重要なものを挙げたのである。またそれらは上や中の私の手記において投げかけた疑問に対する解答ともなっており、全体

を通しての重要な語や表現となっている。

## 6. 回想における「～といふ言葉」

### 6.1 『門』の場合

『ころ』において「～といふ言葉」で引用されている語や表現は、その作品の主題に関わる重要なものであった。それでは他の作品の回想部分においてもそのような働きを持っているのであろうか。

『門』では(14)において、京都で宗助と御米とが出会った当時のことが回想されている。

① 其頃の宗助は今と違つて多くの友達を持つてゐた。(中略)彼は敵といふ言葉の意味を正当に解し得ない楽道家として、若い世をのび〜と渡つた。

(14-2)

② 宗助は海の見える一室の中に腹這になつて、安井へ送る絵端書へ二三行の文句を書いた。其内に、君が来ないから僕一人で此所へ来たといふ言葉を入れた。

(14-5)

③ 安井は御米を紹介する時、「是は僕の妹だ」といふ言葉を用ひた。宗助は四五分対坐して、少し談話を取り換はしてゐるうちに、御米の口調の何処にも、国訛らしい音の交じつてゐない事に気が付いた。(14-7)

この三例ともに、同じ語や表現がこの文章以前には見られない。ただし、三例目は発話の引用であるが、再度の引用ではない。そのためそれぞれの語や表現の印象度は弱い。最初の例は、宗助の以前の性格について、また二例目は手紙の内

容についての説明である。そしてこの三例目は、安井の発言に対して疑義を挟むために、利用したものである。いずれもそれぞれの場面においては重要な表現であり、現在の宗助と御米の状況を考える上では参考となるが、特に主題に関わるような重要な語や表現ではない。

### 6.2 『彼岸過迄』の場合

それでは、後期三部作の最初の作品である『彼岸過迄』ではどのようになっているのだろうか。「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」において回想部分に出現している用例を挙げる。

① 母の性格は吾々が昔から用ひ慣れた慈母といふ言葉で形容さへすれば、夫で尽きてゐる。僕から見ると彼女は此二字の為に生れて此二字の為に死ぬと云つても差支ない。(「須永の話」4)

② 僕は自分と千代子を比較する毎に、必ず恐れない女と恐れる男といふ言葉を繰り返したくなる。仕舞にはそれが自分で作つた言葉でなくつて、西洋人の小説に其儘出てゐる様な気を起す。(「須永の話」12)

③ 叔母は英国流の紳士といふ言葉を誰かから聞いたと見えて、二三度それを使つて、何の心得もない母を驚ろかしたのみか、だから何処となく品の善い所があるんですよと母に説明して聞かせたりした。(「須永の話」18)

④ もし僕が自分の品格に対して尊敬を払ふ事を忘れたなら、「然し高木さんには気に入るだらう」といふ言葉を其後へ虔度付け加へたに違ない。其所迄引き摺られなかつたのは、僕の対面上

まだ仕合せであつた。（「須永の話」31）

- ⑤ 愚図とか煮え切らないとかいふべき所に、卑怯といふ言葉が使はれては、何だか道義的勇気を欠いた——といふより、徳義を解しない下劣な人物の様に聞こえて甚だ心持が悪いから訂正して貰ひたい。（「須永の話」35）
- ⑥ 僕は誰にでも明言して憚らない通り、一切の秘密はそれを解放した時始めて自然に復る落着を見る事が出来るといふ主義を抱いてゐるので、穏便とか現状維持とかいふ言葉には一般の人ほど重きを置いてゐない。（「松本の話」5）
- ⑦ たゞ彼の健康状態が旅行に堪へるかどうかを気遣ふ丈だと告げた。（中略）僕は大丈夫だと答へた。妻も大丈夫だと答へた。姉は安心といふよりも、寧ろ物足りない顔をした。僕は姉の使ふ健康といふ言葉が、<sup>からだ</sup>身体に関係のない精神上の意味を有つてゐるに違ないと考へて、腹の中で一種の苦痛を感じた。（「松本の話」9）

⑤と⑦の例以外は、それ以前の文章には出現していない。また①・②・④は口に出していないことばである。『彼岸過迄』は短編の組み合わせになっており、「～といふ言葉」で取り立てられている語や表現は、「須永の話」では須永の立場からの彼にとって重要な語や表現であり、また「松本の話」でも松本の立場にとっての重要な語や表現である。しかし、『彼岸過迄』は先に述べたように、後半は語り手の異なる回想になっているため、作品自体に全体に関わる主題は見出すこ

とは困難である。

### 6.3 『行人』の場合

『行人』の回想部分、最後の章である「塵勞」の中の一部である。この箇所はH氏からの手紙の内容となっている。短い割にはそこで使用されている「～といふ言葉」の数が多いといえよう。岩波書店の全集でいえば、『行人』は全体で448頁であるが、H氏の手紙の部分は386頁から448頁までの63頁に過ぎない。H氏の手紙による回想に「～といふ言葉」の用例が多いのは、兄がことばについてこだわりを持っているからである。

- ① 何処迄伴れて行かれるか分らない。実に恐ろしい  
「そりや恐ろしい」と私も云ひました。  
兄さんは笑ひました。  
「君の恐ろしいといふのは、恐ろしいといふ言葉を使つても差支ないといふ意味だらう。実際恐ろしいんぢやないだらう。（32）
- ② 二人はそんな事から神とか第一原因とかいふ言葉をよく使ひました。（34）
- ③ 私は静かな夏の朝の、海といふ深い色を沈める大きな器の前に立つて、兄さんと相對しつゝ、再び神といふ言葉を口にしたのであります。  
然し兄さんは其言葉を全く忘れてゐました。思ひ出す気色さへありませんでした。（34）
- ④ 岩から岸に渡した危ない板を踏みながら元の路へ引き返す時に、兄さんは「善男善女」といふ言葉を使ひました。

それが雑談半分の形容詞ではなく、全くさう思はれたらしいのです。(35)

- ⑤ 兄さんはたゞ自分の周囲が偽いつはりで成立してゐると云ひます。(中略)私は何でこの空漠な響を有つ偽いつはりといふ字のために、兄さんがそれ程興奮するかを不審がりました。兄さんは私が偽いつはりといふ言葉を字引で知つてゐる丈だから、そんな迂闊な不審を起すのだと云つて、実際に遠い私を窘なめました。(37)
- ⑥ 私はどう〜兄さんの前に再び神かみといふ言葉を持ち出しました。さうして意外にも突然兄さんから頭を打たれました。(39)
- ⑦ 私が兄さんに遣られた原因も全く其処にあつたのです。事実私は神かみといふものを知らない癖に、神かみといふ言葉を口にしました。(41)
- ⑧ 兄さんは神でも仏でも何でも自分以外に権威のあるものを建立するのが嫌ひなのです。(此建立たてまつといふ言葉も兄さんの使つた儘を、私が踏襲するので)。(44)
- ⑨ 「先刻君は蟹を所有してゐたぢやないか」  
私が兄さんに突然斯う云ひ掛けますと、兄さんは珍しくあはゝと声を立てて愉快さうに笑ひました。修善寺以後、私が時々所有もつといふ言葉を、妙な意味に使つて見せるので、単にそれを滑稽と解釈してゐる兄さんには可笑しく響くのでせう。(48)
- ⑩ 兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、必竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。(48)

このように、H氏と兄との間でことば

の用い方についてのやり取りが行われている。兄は、H氏の使用することばには実質的な意味が籠もっていないと非難している。やり取りされていることば、例えば「偽」や「神」、「所有」などから、兄の考え方が理解できるものの、『行人』全体の主題とは大きく関わってくるものではない。H氏の手紙の箇所は「塵勞」の章の中でも一部分である。また手紙を書いたH氏は私(二郎)に頼まれて精神的に病んでいた兄を旅行に誘い出したに過ぎない。これまでの状況全体を把握しているわけではない。あくまでも兄の状態を報告しているだけである。

『行人』においては、このH氏の手紙の箇所以外は、私(二郎)による一人称の語りになっている。一人称の語りは、私の立場からではあるが、全体を把握できる状況にある。また『行人』が『彼岸過迄』と同じく短編の組み合わせになっており、それは『彼岸過迄』を扱った際に述べたように、それぞれが回想的であるといえよう。

したがって、『行人』においては、回想であるH氏の手紙よりも、むしろ私の語りの部分に全体に関わる重要な語や表現が出現している可能性がある。ただし、兄に関してはH氏の手紙で示された語や表現が参考にならう。

## 7. おわりに

『こころ』において「〜といふ言葉」によって取り立てられている語や表現に、作品の主題に関わるものが多かった。それは、他の作品の回想部分と比較してみると、回想という性格だけによるものとは言えないようである。他の作品に

比べて、先に使用されている語や表現を「～といふ言葉」によって再度引用している例も多い。それによって印象づけを行っていることもその要因の一つといえよう。

しかし最も大きな要因は、『こころ』の構成や内容によろう。上の「先生と私」と中の「両親と私」は私の語り、下の「先生の遺書」は先生の遺書に記された、先生の語りである。異なる二人の語りから成っているが、下の「先生の遺書」は先生が私に伝えたい内容だけを選びすぐったものである。まずこの点だけでも、そこには主題に関わる重要な語や表現が示されているといえよう。さらに、私はその先生の遺書を読んで全体の状況を把握している。その上で、私と先生との関係を回想した、上「先生と私」と中「両親と私」を執筆している。そこでは、気になった先生のことばに対して、「～といふ言葉」を用いて疑問や不審を投げかけている。その投げかけ方はその答えを読者に下の「先生の遺書」の中に求めさせえるような記述の仕方である。

『こころ』のこのような構成によって、「～といふ言葉」で取り立てられている語や表現が作品の主題に関わってくる場合が多いのだと考えられる。

#### 注

- 1) シンポジウム当日の石出靖雄氏の「『こころ』における「のだ」文の使われ方」の発表並びに資料による。
- 2) 引用は、岩波書店『漱石全集』1994年による。振り仮名は必要な箇所だけにとどめた。
- 3) 「～とかいふ言葉」の用例も含む。

- 4) 青空文庫での検索にあたっては、「という」の形式で行っている。

#### 参考文献

- 寺村秀夫(1981)『日本語の文法(下)』  
国立国語研究所  
中島孝幸(1990)「「という」の機能について」『阪大日本語研究』2  
丹羽哲也(1993)「引用を表す連体複合辞「トイウ」」『人文研究』45(1)

#### 付記

本稿は、シンポジウム当日に、小発表「『こころ』における「～といふ言葉」の働き」として、わずかな時間で発表したものを、論文になるように、内容を補充してまとめたものである。

当日のパネリストの発表や討論、またフロアーからの質問や意見、それに対するパネリストの回答を、この論文の執筆にあたり大いに参考にしている。感謝申し上げます。

(明治大学)